

19歳のとき、私は1冊の絵本に出会いました。その絵本は私が小学校のときに母が買ってくれた本でそれまでに何度も読んでいましたが、高校を卒業し、その本の歴史的背景を理解した上で読んだとき、初めて見つけたものが沢山ありました。当時私は芸術大学を受験するため毎日受験勉強と受験実技の練習をしていましたが、その本は、私の必死な受験生活を一瞬にして色とりどりの夢で満たしてくれました。とても感動しました。そして、そのときから現在に至るまで私の目標であり、私の夢であり続けています。

その本は「バーバラへの手紙」という本で、ナチスドイツの時代に父親から幼い娘に宛てて何通も書き送られた実存の手紙を集めたものです。強制収容所にいる父親は、ユダヤ人を助けたことを咎められ収容されたのでした。妻と4歳になる小さなバーバラはユダヤ人だったため、オランダのアムステルダムに隠れ住んでいました。

父、レオ・メーターは、バーバラに沢山の挿絵で溢れた手紙を描きました。彼はイラストレーターだったので、微笑ましく温かな挿絵が沢山バーバラのもとへ届けられました。

私はこれを見て、辛く厳しく、孤独な収容所の中にいながら、こんなに楽しく温かくて優しい絵が描けるとは何て強い人なのだろうと思いました。終わりの見えない毎日の中で、こんな夢を描けるなんて素晴らしいと感じました。そして考えるうち、それはきっと喜ばせたい相手がいるからだと分かりました。笑顔にさせたい愛しい相手を思う気持ちが強さになると気づきました。そのときからずっと、心を込めて相手を思う力強さに惹かれ続けています。家族の絆の温かさ、親がわが子を思う感情に魅せられ、それをテーマに作品を制作しています。

私は美術工芸専門の高等学校で染織を学び、その後、大学、大学院と継続して染織を専攻しました。現在はフェルト技法で絵画的な表現を追究しています。

フェルトの平面作品では、羊毛の繊維の跡がそのままのこり、ふんわりとした素材の持つ温か味が作品から感じられ、自分のテーマである親子の愛情、人と人との絆を表現するのにとても適していると感じています。

現在はベルリンで制作活動をしながらか、展覧会で作品を発表することと並行して、絵本の挿絵として作品を出版したいと思い挿絵の制作を行っています。

愛情を沢山受けて育つ子にも、そうでない子にも寄り添うような絵本を出版することが大きな目標のひとつです。

実際にやわらかく温かい羊毛の持っている素材の力を借り、みる人の目に優しく、愛情溢れる世界をじんわりと伝えたいというのが、私がフェルトで制作を続ける理由です。絵筆には出せない繊維素材特有のぬくもり、そして編み物や刺繍など手芸と呼ばれる分野独特の「手仕事」の跡を残せることがこの方法の強みであると思います。

私は今後も、家族間の絆、親が子を思う気持ち、子が親を求める姿を、温かいタッチで描き続けていきたいと思っています。心を込めて誰かを思うことの素晴らしさに焦点を当て、繊細に、しかしはっきりとそれを描写していこうと思っています。